08年イカ類

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

	数量										
	漁獲		産地					輸入			輸出
年	スルメイカ	アカイカ	スルメイカ 生	スルメイカ 冷近	スルメイカ 冷遠	アカイカ 生	アカイカ 冷	マツイカ	コウイカ	調製品イカ	
19	253.5	21.9	83.4	50.5	2.5	0.6	4.2	77.1	26.0	49.8	14.3
20	216.1	26.2	52.2	43.6	1.3	0.0	13.1	67.8	19.7	43.3	31.3
%	85	120	63	86	51	5	314	88	76	87	218

	数量										
	東京			在庫量			消費支出	加工品			
年	スルメイカ 生	スルメイカ 冷	甲イカ 冷	スルメイカ	コウイカ	その他	生（グラム）イカ	イカ製品	イカ塩辛	干スルメ	燻製
19	13.7	3.4	1.1	45.5	9.3	29.4	3,158	46.484	23.2	10.61	7.87
20	12.4	4.3	0.6	50.5	8.1	30.0	3,115				
%	91	128	60	111	87	102	99	0	0	46	0

	価格											
	産地					輸入		輸出	東京			消費支出
年	スルメイカ 生	スルメイカ 冷近	スルメイカ 冷遠	アカイカ 生	アカイカ 冷	マツイカ	コウイカ	イカ	スルメイカ 生	スルメイカ 冷	甲イカ 冷	生（円）イカ
19	159	233	198	134	334	406	812	151	430	329	656	3,003
20	162	214	183	84	279	370	756	129	415	317	623	2,893
%	102	92	92	63	84	91	93	85	97	96	95	96

スルメイカの資源

平成年代に入って日本近海のスルメイカの漁獲は、平成10年を除くとかなり安定的に推移しており、20～40万トン台の高い数字を記録しており、本年もその水準の中での漁獲であった。

太平洋側の漁獲の殆どを占める冬生まれ群（冬季発生系群）の資源量は、1980年代の終わりから増加傾向を示し、1996年には138万トンに達した。2008年の資源量は2007年を38万トン下回る82万トンと推定された。親魚尾数は資源量と同様に1980年代後半から増加傾向を示し、1993年には最大の16億尾であった。その後大きく変動しつつ推移した。2008年級を産んだ親魚尾数は前年度を6.6億尾上回る14.6億尾であった。現在の冬季発生系群の資源水準は過去29年間の資源量の推移から中位、動向は2004～2008年の5年間の変化から横ばいと判断されている。

主に日本海（対馬暖流系）で漁獲の対象になる秋生まれ群（秋季発生系群）の資源水準は、1980年代前半は減少傾向にあり、1980年代は主に50万トン前後（1981年～1989年の資源量の平均値は51.2万トン)、1986年には22.4万トンとなった。1980年代後半以降は増加傾向となり、1990年代の平均資源量は108.7万トン、2000年前後には主に150万～200万トンとなった。2004～2007年は100万トン前後に減少したが、2008年の資源量は171万トンに増加した。漁獲割合は1980年代に資源量の減少と共に上昇し、1980年代半ばには35%～40%となった。しかし、その後は資源量の増加と共に低下し、1990年代は30%以下、近年は20%前後であった。

なお、スルメイカの資源量は中長期的な海洋環境の変化によって変動すると考えられ、1990年代以降の資源の増大は、海洋環境がスルメイカにとって好適な状態に変化したためと判断されている。

産　地　水　揚　量　と　価　格

20年の日本近海のスルメイカ水揚量（継続漁港）は生5.2万トン（前年8.3万トン）、冷4.4万トン（前年5.1万トン）と生鮮は倍増、冷凍はやや減少した。

ＴＡＣに基づく漁業種類別漁獲量はトロール3.1万トン（前年4.4万トン）、まき網0.5万トン（前年1.3万トン）、釣りの冷凍4.6万トン（前年5.1万トン）であったが、トロールとまき網、釣りとも低調な漁況が続いた。

冷凍は、本年も昨年同様北陸船団が日本海スルメイカ主体の操業をし、青森、北海道、岩手船団がアカイカ（ムラサキイカ）と日本海に分かれての操業であったが、赤イカは前年度漁期の最終航海が極めて好調に推移し、年度明けの初漁期も好調で、水揚げも多かった。しかし、秋から冬場の漁は昨年同様極めて低調に推移した。

生スルメイカの海域別漁獲量は、日本海6,374トン（前年10,630トン）、太平洋41,042トン（前年68,896トン）、オホーツク0トン（前年0トン）で、特に太平洋、日本海ともかなり減少したのが特徴である。また九州北部での漁獲は4,264トンで前年（3,912トン）を引続きやや上回った。

本年も中型船凍船は、当初スルメイカとアカイカ操業とに分かれたが、今年も概ね日本海操業が主体で日本海でのスルメイカ漁は前年をやや下回り、やや漸減傾向が続いた。

また本年も業界では、従来からスルメイカ一極集中の排除、三極漁場の選択的移動、漁獲努力量の分散、急速凍結によるブロック製品の品質向上等付加価値の高い魚種や製品作りの奨励、サイズ選択、IQFの促進、アカイカの高度利用等の指導は本年も続いた。

産地価格は、生鮮162円（前年：159円）、冷凍は214円（前年：233円）となり生鮮。冷凍とも小幅な変動幅での動きであった。

本年の特徴は、①本年の冷凍スルメイカは水揚げがやや減少したが、端売りサイズが多く安値になった、②本年の冷凍スルメイカ（Ｒ）のサイズ組成は、21～25尾サイズが28%で前年（24%）をやや上回り、26～30サイズも27%で前年（24%）をやや上回り、サイズ組成も20尾以下は22%で前年（13%）よりかなり多く、全体的に大型化が目立ち、端売りサイズに偏った組成となった、③ＡＲ、ＦＯＲの漁場がなくなり、ペルー水域等、ＮＺ、ロシア等になり海外でのイカ類の漁獲は少なくなっている、こと等である。

在　庫　量

20年は昨年より極めて多い6.8万トンの在庫から始まり、本年も例年通り6,7月に最低になったが、その数量は昨年を上まわる3.5万トン前後であった。その後、秋以降は例年どおり増加に向かい、生漁（釣り・まき網・トロール漁）や冷凍もそんなに多い漁獲ではなかったものの消費不振もあって、在庫もやや膨らんだ。この結果、越年在庫は6.4万トンと昨年同様多いい在庫となった。したがって平均在庫量も、上半期の多さを反映し5万トンで、前年（4.5万トン）を上回った。

消　費　地　入　荷　量　と　価　格

スルメイカの東京消費地入荷量は、生1.2万トン（前年1.4万トン）、冷凍4.3千トン（前年3.4千トン）であった。本年は太平洋生イカ漁が低調であったことで生鮮の入荷が前年を下回った。　価格は、生415円（前年430円）、冷317円（前年329円）で生・冷ともやや下げた。

消費支出でみると購入数量、購入金額とも前年を若干下回った。

ＮＺイカ

20年のＮＺイカ釣漁は、本年は２隻、1.4千トンで前年（２隻、1.5千トン）をやや下回った。

産地水揚量（全漁連）は、1,267トンで前年（1,421トン）を下回った。

価格は183円で前年（195円）をやや下回った。

アカイカ

本年も初漁期に好調であったが、その後秋から冬にかけては昨年同様極めて低調な漁模様であった。したがって中型船による近海操業は近年でも比較的高い水準の漁となった。また沖合（東経170度以東水域）の漁は１隻当たりの漁獲が比較的中漁の部類に入る７７トンであった。小型船の漁獲は昨年の577トンに比べると極端に少ない28トンの水揚げに終わった。なお、大型船（沖合操業）は操業がなかった。なお、前年は3隻0.1千トンであった。

全漁連集計によると、生28トン（前年577トン）、冷1.3万トン（前年0.4万トン）であった。

産地価格は、生108円（前年166円）、冷279円(前年331円)であった。

海外アカイカは、ペルーのみ(200海里内外)の操業であったが、3隻-13.7千トンで、昨年実績（4隻-15.6千トン、1隻-0.2千）を下回った。

本年のペルーアカイカの耳とりのサイズアソートは5尾以下が98%（昨年は5尾以下98%）と昨年同様に超特大サイズに偏っていたが、それでも３尾サイズが比較的多かった。

産地水揚量（全漁連）は、13,578トンでほぼ前年（13,592トン）並みであった。

価格は156円で前年（139円）をやや上回って推移した。

輸入イカ

20年の輸入イカ（コウイカを除く）は、中国主体に6.8万トン前年（7.7万トン）を下回ったものの多いことに変わりはない。

価格は、このところ上昇が顕著であったが370円と引続き前年（406円）を下回り、平成の初頭並みの水準まで下がった。

冷凍イカの主要輸入国は、中国17,120トン（前年30,144トン）、タイ7,101トン（前年8,116トン）、ベトナム5,477トン（前年6,818トン）、米国3,885トン(前年5,475トン）、フィリピン339トン（前年638トン）、インド1,181トン（前年1,047トン）、NZ855トン(前年3,345トン)、ペルー161トン（前年7,735トン）、アルゼンチン0トンで（前年10,421トン）相変わらず中国のシェアが高かったが、南米海域の漁不振もあってかマツイカ、アカイカ関係でアルゼンチンやペルーからの搬入が少なくなった。

20年の輸出は、3.1万トンでペルーへの輸出が大幅増となったことで再度輸出も増え、前年（1.4万トン）をかなり上回った。

モンゴイカ

20年のコウイカの輸入は、2万トンで前年（2.6万トン）を引続き下回った。

輸入価格は、756円で前年（812円）を下回った。

東京消費地入荷量は、0.6千トンで前年（1.1万トン）を下回った。

価格は、623円で前年（656円）を輸入価格の下落を反映しやや下回った。